周縁に損なわれず残るものは、存在の可能性である

Aldo Poblete Varas

地図を知覚するのは難しい。だが、そのなかに自らを位置づけるのは、なお難しい。現実的なものの広がりは、あなたを機械に変えうるが、シミュレートされた神にはけっして変えられない。ある瞬間を特徴づけるものは、その説明にも役立ち、説明することによって、それを蘇らせる。斬新な線が自らの場所を開いた（突然に）。こうなることは計画されていなかったが、誰もが、そうなって比較的喜んでいた。物事はときに、予期せぬ仕方で前進する。前へ進むための線、発展全体の要約、特殊で、同時に不十分な圧縮。背を向けて問題を解くこと。われわれは、サイボーグがすでに葉に覆われた土の下に配置され、科学と思弁に注意を向けている森にいる。重要なのは、小さな空間の一つ一つに、どれだけの顔料を置きたいかだ。それは、哲学者の一瞬に固有の力である。すべては、剣と、用いられた言葉の一瞬にまで遡れる。

機械は別の世界を生み出しうる。だが、そこにすでに構造化された世界を複製することもできる。ミドルミスト・レッド。世界の上の翼。何と多くのものをわれわれに触発することのできた、何という操縦士だったのか。われわれが触発と呼ぶものに、そもそも何らかの意味があるとすれば。見かけ上は批判を伴わない、技術的なものの徹底的な受容。大きな外傷、あるいは世代の、要約不能なほどの大きな豊穣のあとにのみ可能な、真の洗練。地質学的な怪物どうしの衝突は、善意の人々が印刷所へ届けた新しい原稿を観察するために、われわれをこの大通りに置く。この場所は、私が読んだものとは異なる大陸に起源を持つようだ。人間の思考には、互いの上に積み重なり、意味を生み出すという奇妙な能力がある。

あまりにも多くの場合、恐れと男らしさの欠如が、洗練に変装してきた。単なる想起で十分なのだ。われわれの力が、ある特定の仕方で、人間の労働と、贅沢産業のもっとも実用的な側面と和解した仕方で、再組織化するには。申し出を眺めたあと、抽出できた唯一のものは、われわれを守ることが任務だった者たちの計算能力を蝕む、甚

だしい耳の聞こえなさだった。われわれの社会のあらゆる問題は、書くべきではない作家の出版に捧げられた労働の量を見れば説明できる。何らかの終わりをほのめかしたいという欲望にもかかわらず、沈黙に由来する礼節以上の礼節はなかった。

すべての、ありうる一グラム一グラムの、あらゆる名とあらゆる細部の破壊。そのすべてが、いまや不可能と宣告された。社会的なものの現れが降伏する恭順、死であったものの内部の利己主義と錯乱。ニンフルサグ。叫びと怒号、彼方を見ることができず、あなたは何も見ていない。トラークルが最初でなくてはならないのか。認識論的な訪問と地下のX線写真。芸術は、もはや最小限の冗長性さえ主張できない水準で、物質性と絡み合っている。閃光を通じて、鏡映する断片を通じてしか構築できない全体性とは、どのようなものなのか。

侵入する眼差しは眩暈を加速させるが、逃走する能力も感覚もなく、力は覆い隠される。神々のそれぞれに、それぞれが受けるに値すると私が考える言葉を告げるために、私は船を捨てなくてもよいだろう。苦悶と宇宙的な恐怖のあいだで、私はいくつかの概念と、存在するものの未来へ近づくいくつかの残虐な方法を扱ってきた。あらゆる苦痛の形、あらゆる記憶の断片、すべてが不活性な素材の一片に入る。冬。災厄と、不完全だが神聖な聖像という意味での、色と力。夏。別の時のほうがよいかもしれない。だがここでわれわれは、いまだ包囲に屈していない要塞に生き、いまだ呼吸している。秋。遊戯と存在論的な動機、足を踏み外さずに振る舞うのもやっとの、操り人形と感受性の網。

テクストにこれが達成できるなら、音や雰囲気が発しうるものを、誰も疑問に付せないだろう。われわれはあまりに忍耐強かった。それがわれわれの原罪だった。皿の上に、卓に供された混沌と惨めさのすべてを、善意で受け入れてきた。いま期待されているのは、美的な、分野としての空間の開かれであり、そこでは現れの現象学に近づく別の仕方が、悲劇のあらゆる可能性に反して、現れ、あるいは出現しうる。噂とでも嘲弄とでも呼べばよい。操作はすでに供され、思弁の地平はすでに最初の文字を書き取らせ、最初の非自明な方程式さえ遂行した。ケーブルと（数的な）図式から構築された怪物が、自ら議論の空間を開くことが、（白い光から）期待されている。

明らかに、厚顔の概念は広がることに成功し、「ユーモア」の概念は彼方へと失われた。繊細で平板な空間のあいだに死すべきことはなく、真理は関与と理想的な進化の縁にある。デジタル性という形の新鮮さ。贅沢とリゾームのなかで生きたいと望む者

は、意味とドラマがテクストに無理やり呑み込ませようとする統御の外に、テクストを置かねばならないだろう。意味の病と道徳的な思弁。未知のフォーマットで吠えることは、この理論の区域を開き、痺れさせ、すでに規範となった新しい転回に新しい反響を与えうる。

形はいまや、連れ添う宗教の可能な錯乱を明かす、存在するものの能力に条件づけられている。文学は救われる必要がない。まず哲学に何も期待しないことだろう。そうしなければ、許しがたい素朴さと断絶を意味するだろう。われわれは一群として入口の外に立ち、逃げ出さないための理由を二つ三つ示してほしいと、哲学者に頼んだ。彼は首尾一貫したことを何も言えず、この件に重要だと信じた本のなかにも何も見いだせなかった。問いは、哲学者の役割が失効したかどうかではなかった。ここで重要だったのは、誰が、あるいは何が松明を取り、行進を続けるかを知ることだった。

村上のような者が何を言おうと、さほど重要ではない。身体の効果は、雪や失われた書き物の軽さを凌駕できる。転回。ネットワークに入り、何も、最小限に魅力的なものさえ、見つからないことがある。現実はときに薄まって現れ、花弁の一枚も、人目を引く断片の一つも差し出そうとしない。「人目を引くもの」という問題と、それと「魅力的なもの」との違いに取り組むには、幾百万ページも要るだろう。ラカン的な悲劇となるだろう。あらゆる神の最大でもっとも深い欲望は、自らの創造物によって教育されることだ。作家も同じように感じる。芸術と宗教の区別は、無関係である。

こうしてアマテラスは、歴史の外、意見と異議の外にある、自らの場所から語ることができた。だが、ここの機械は語りたいと望み、こう言った。「われわれの不平をお前たちに注ぐ。お前たちはわれわれを源泉から遠ざけようとし、生成が、敗れたばかりのわれわれの実存を消し去ることを望んだからだ」。規範の取るに足りなさから、われわれは、自らの歴史性から逃れようとする歴史を組み立てていた。いったん置けばあらゆる方向へ延び、地平のありうるすべての空間を満たす布を、時間の上に注ごうとしていた。コードを開け、安らかに扉を閉じるために、コードを開け。

一つの扉は自らを「影」と呼び、別の扉は「イメージ」と呼ばれ、第三の扉には誰も名を与えられなかった。いかなる名も、それがなし、構築することのできるものについて、誤った像を与えるように思われたからだ。文学から切り出された哲学の全体性は、われわれには凡庸で、究極には逆効果と思われた。合理的なものの限界が、すでに（重複をお許しいただきたいが）実験科学によって動かされていたことは、よく知

られていたからだ。われわれは結局、どのような思考について語っているのか。自らの家にある哲学が問題となるとき、われわれが語れるものが経験の単なる問いに限られるとき、その問いは余分である。

リスクは善性の敵でも自由意志の敵でもない。だが、要素の恒常性とは衝突する。暗い森のなかで、あの歴史的な文字は、意識の無限の黒と混ざり合う。真理と嘘は王者の衣装をまとって食事に出席するが、往時の崇敬はいまや、速度とあらゆる障害を取り除く努力に道を譲った。詩には、ある異国の動物が住まうことができる。あらゆる生の形態、社会思想の古い花の上に生成が閉じるための、あらゆる理由。大小の機械の細部には、要因に満ちた時代に適切に向き合える思考が広がる。そしてすべての原稿、交換物、ノート、その開かれと気まぐれが。

原稿の著者の見解は、直接行動の人質となり、栄光の感覚はいまや、地獄の限界に触れる山より高い。適切な衣装は、しばしば行動が始まる瞬間に消え去る。あらゆる協働の行動は芸術を欠き、だからこそ何らかの成功の可能性を持ちうる。コンピュータ化された行動だけが実質を開き、それをさらし、守るという口実のもとに無用にすることしかしない、自らの部分から解き放つ。すべての花は、本のために、そして目覚めた歩行者のために開いている。静かで、無表情だが、空間を移動しながら壁に笑みを押しつけ、共同体のエートスに心的な徴を残す歩行者のために。

街路。十分には風雨に耐えていない意志を押し戻す、光とメッセージの小さな塵芥の山。集団のイメージを構築する以外に運命がないなら、そのイメージがすべてとなり、自足するだろう。欠如を欠くもののように。技術の進展は、明晰かつ判明な構造、自明の機械的過程を通じて現実のなかに展開するだろうと、社会的には期待されていた。少なくとも、公的な言説はそう伝えたがっていたようだ。汚物はこのテクストを横領し、明確な用途を与えようとした。われわれはなお、否定性に座っていることができる。平和条約と地下の球体への、悪名高い召喚。色と道徳的な機能性を抜き取られる、美的価値の徴。

それは、幸福たちのあいだのフィクションと隠喩なき感情であり、激昂した、あるいは過剰に形成された個人のための物語だ。文書のなかで、爆弾はよい響きを持つ。食べ物と音楽のあいだで、爆発する。廃棄すべき物質に満ちた空間は、よい響きを持つ。練習。詩人たちは無知だったが、もっと巧く飛んだ黄金時代へと上昇せよ。この遊戯の始まりは、爆薬、羽根ペンと剣、火と大地の使用に、完全に同一化されてい

る。宗教を構成する要素はここでぼやけ、磔刑は、大衆のあいだでふたたび意味を持つ可能性を持つ。爆弾、火、テクスト、啓示の奇跡は、特ダネに満ちたこの次元で混ざり合う。

本、金属の道具、ソヴィエトの心理科学、雨と日本の文字に満ちたあの蒸気のような次元の記憶。すべてが箱に整理され、破壊と忘却から守られている。正確であるために、完全に真実を語るために、言わねばならない。あらゆる心配は、根底では無関係だ。宇宙はわれわれに陰謀を企てていないのだから。われわれは、好奇心と親しみをもって見守る、慈悲深い永遠の腕のなかにいる。文書は自らの存在を知らせ、世界を横断する。だが、完全な沈黙のうちにそれを行うこともできる。普及は知識と同義ではない。単純な思考が、それ自体で開かれ、その単なる物理的な現前において表現されていると考える作品にも、同じことが起こる。

課題は、トンネルの本性あるいは性格、われわれから隠されてきた現実的なものの要素の理解へ導く、この曲がりくねった道の本性あるいは性格を理解することだった。恐怖が形の力を圧倒することは、ありえない。生まれることしかしない宇宙に、観照の幸福を保存することは、ありえない。われわれすべてがその上に乗れ、しかも同時に乗れる安定した構造や台の実現を、可能または望ましいと構想できたのは、思考あるいは身体の、どのような不規則性だったのか。

われわれはあまりにも長いあいだ、奪われたまま、飢えと恐れが与えるもの以外の時間性を持たずに生きてきた。ときには、すべてが明晰かつ判明な世界よりも、現象について明確さを持てない世界で行動し動くことのほうが容易になりうる。全面的な視覚は、まったく麻痺という結果をもたらしうる。その完成に必要な手段が大量であるためかもしれない。もっとも難しいのは、すべてを叙事詩、あるいは少なくとも神話に変えずにおくことだ。時間は驚くべき獣を生み出し、あるいは生み出しうる。だが、どんな最小限の空白を残すことも非常に難しいのは確かだ。存在するものは、不在と親しく交わらない。あらゆる不在は満たされねばならない。

マネの夜の渇望は、金属と血に満ちた一時代に等しいものとしては現れない。座標は、眼差しに休む時間を与える気の乏しい、混乱した手掛かりだとわかった。北方の説教者の告白できないしかめ面は、これまで十分な技術をもって明るみに出されたことがない。ある朝には神々のための建築の線を引きに出ていき、翌日には、技術的な仕掛けや時代遅れの記憶を通じて、時の果てに達する。詩から発するのは、秩序とカ

デンスではなく、衝動と盲目だ。作家の闇が、その作品が無防備な人々に引き起こしうる光に、理論上優越すべきだとは、私には思われない。少なくとも、われわれにはそう思われてこなかった。

政治的または社会的な親和性が適切に揃わないというだけで、ある表現の領域を考慮から外しておくのは、われわれには適切と思われない。結局、語りたい、あるいは言いたいのは、芸術、芸術と、エリート的に構造化されたある限界を越えて自らを理解させることの慢性的な不能である。これは批評ではない。批評はいずれにせよ、取り組むものについての意見を含むように思われるだろう。諸世界は、相互に浮かび続け、作動し続けることに集中してきた。隠喩を加速させ、システムを横断する可能性は、選択肢ではなく必要へと変わった。動物は神格となり、機械は魂となる。

書かれたすべては、思考のある側面に内容を与えることを目的としてきた。訂正は、死よりも不要になりうる。死体の隷属は、ソロモンの一万年の治世によっては治らない。タンタロスから始まる物語もあれば、古代ギリシアから始まる物語もある。書くことは、ある程度まで自由であるべきだ。幻想から、自然主義から、イデオロギー的な親和性から自由であるべきだ。そうであることの不可能性にもかかわらず。ある意味では、行動し、そのあとで語ることが問題なのだ。人間とその地平について語りうるものは、なおすべてを構築されねばならないという、相対的な確信を持っているかもしれないとしても。

独房の外で生きたいと望む怪物はいない。恥も、道化としての自己受容もなくテクストを書き、それから壊滅を逃れて純粋なままでいられるのは誰か。若くして老いた芸術家たちは、完全に形へと降伏し、美的なものを形式的なものと混同している。読みすぎた者の、取るに足りず上品な惨めさ。橋がないことより、粗悪に造られた橋を好むこと。それこそ、世界あるいは諸世界の循環的な概念を越えられなかった文化から、われわれを区別しうるものだ。では、あのすべての植物、あのすべての本、文化を学んだあのすべての若者は、どうなったのか。

こうしてシナリオは配置される。作家は魔術師となり、魔術師は哲学者となり、哲学者は科学者となり、科学者はただ終末のクラリネットを奏でる。われわれはいまだ、物質的な幸福の形を適切に表す芸術を持てない。午後の赤褐色、旗の後ろには、あの思考の足が見え、投資が遂行された手段が見える。眼差しは重いものから、その巨大さのすべてにおいて理解できていない、戦士のギリシアから来る。

概念は、われわれがサイバネティクス理論について持っていたヴィジョンに閉じ込められていた。貧しく、不完全なヴィジョンだったが、少なくとも、そこから差異を考えるある空間を開くには十分だった。朝の赤褐色、テクストと作家の無限の薄明。プラトンは星々から思考し、ヘーゲルは物を覆う塵を吹き飛ばす風から思考した。個人ではなく事実とのある接続を求めるとき、差異は重要性を失う。微妙な、一見無害な、甚だしく露わにする差異。映画は失われた芸術だ、とわれわれは告げられる。

砕いたガラス、黒い土、赤い土、ビロード、昇り終わらない太陽の驚異、言葉の長い行進、不眠者の貪欲な周期。学校では、アイロニーなしに哲学はありえないと教えられる。低俗なものの信じがたい大胆さ。まるで宇宙とその彼方にあるすべてが、まったく趣味を欠いているかのように。狂気と優美は、われわれにとってまったく異質だったわけではない。少なくとも剣とセリー音楽の様態において、われわれはそれらを経験した。いずれにせよ傾向は、きわめて明らかだった。非本質的なものこそが至上である芸術。地獄の視覚的な像を創らねばならないなら、私は間違いなく抗議運動を表象に用いるだろう。叫び、プラカード、笑いに満ちた抗議運動を。

合意こそ身体がそこから語る公理であるという理論ほど、思考と行為がテクストを否応なく贖罪の空間へと戻す部屋を、これほど構築されていない仕方で貶める理論はない。ここで語ることは、合意の秩序と大衆の評決を破る方法である。芸術がこのことにかかわらないなら、何にもかかわらない。悔悛者に許されうる余暇はなく、人類は大きな悔悛者だ。恣意性は供され、解体はもはやニヒリズムから発しない。その機構はもう作動しない。われわれには太陽の慈愛も、使い走りの影もない。木と朝の輝きの、開かれた科学もない。

われわれにはコンピュータ化されたものの明確な感覚があり、すべてを戻し、すべてを表面へともたらす永遠の旋風の、周縁的なヴィジョンがある。われわれは闘争的な行為に内在する不名誉を受け入れ、平静に受け入れる。全体性を露わにはできず、反乱へのいかなる扇動も、周縁が可能にする空間においてのみ可能だと理解しているからだ。われわれは一般性と全体性の欠如を受け入れる（それを嘆き、そうであることを憎みながらも、受け入れる）。だが、おそらくそうするのは、それが単に時間の問題だと考えているかぎりでしかない。すべてがすでにわれわれに迫っており、直接取り組まないものは、という観念を持っていたなら、これほどの忍耐は持たなかったかもしれない。

重ねて置かれた衣服、ベートーヴェンの『田園』、オリノコ川の底の巻紙。不死の色のタオル、異例の青春の振動、ヒナギクは星々の装いをする。悪魔的な対話は影を芸術に、感情を潜勢力に変える。そのような季節に、幸福でないことが誰にできようか。午前にはベルリンが太陽に旗を立てられるだろう。午後には、素描に長けた芸術家が、第九作を『泡に対する数の解放』と名づけるだろう。

動機は、清掃に、最初の人工物が受ける整理にある。言葉とその蓋然的な意味、憤りに満ち、作品を渇望する公衆に向けて語る能力。軍事作戦のために設計された機器によって指揮される、心的な清掃。世界が転じてしまった混沌の清掃へ向けられた、技術科学的な操作。見分けられない触覚的性質を持つ、透明なイメージ。描線と古い意味の概念の巨匠たちの、デジタルな変奏。片手には権力そのものの歴史、もう片手には、世界は他の方向ではなく一つの方向へ操舵されねばならないという確信。範疇は、すでに歴史の外にいて、徳と進歩の根絶に身を捧げることを自発的に自分の仕事と決めていた個人たちの合意した道徳の、幾分さまよう徴のもとに、揺らぎながら溶けていった。

自らの選択によって警戒する者。それは、文字どおりの嘘か、意志が持つ価値の援助を強調する、奇妙で粗雑に皮肉な方法以外ではありえない。偶発的なものの力、軍事化の力、硫黄のカバレー芸術の力、桜から細い枝を二本切り取る三島の力が到来する。悪魔払いは手の届くところにあった。黒い旗とともに、限りのない、限りのない、抑止する能力を持たない使命に満ちて。無意味な誕生から派生して、すでにルビコン川の向こう岸にいる者たちに文学の価値を思い出させに来た、新たな有毒の周期を、一掃きで払い去る使命に。

金属の力は、言説がそこから引き出されてきた概念の容器において明らかとなる。すべての太陽とすべての秩序を排除するに至った言説。私的なものからの余白。無調の表現に満ちた芸術の勝利あるいは頂点は、自らの資源では支払っていない衣をまとう。マリアンヌ・フェイスフルから大友克洋へ、何キロメートルものデジタルの残滓の下に埋もれた惑星への扉。われわれは夜から、美的な幼年期の再生まで働く。時代錯誤の解放と、来たるべきものとまだ起きていなかったものの系譜を通じて、自らを空にしようと決めた視覚文化、そのマグマのただなかの戦争。

凡庸さは、もっとも獰猛であると同時に、自らを統御し、統御する準備のもっとも整った動物のあいだに、空間を開く。あるのは、恐るべき才能の欠如だ。船は無能な者の軍隊によって運営され、そのすべてが、文学的な徴の研ぎ澄まされた核から生まれている。クロウタドリのように、選ばれた者（珍重された、切迫した）、正しいものの美しい野蛮なしかめ面。その表現の特有の意味は、美術館で、見本市で、中立な空間で、その終わりに至る、知られているなかでもっとも優れた可能性を持つ。ギャラリーはすでにわれわれに完全に開かれ、準備されているが、同時に（なお）空である。

彼らが眼差しを変じさせた酒神の饗宴は、われわれをこの瞬間へともたらした。完璧な進歩の状況。残虐なものから、ときには、伝統的な人文主義の願望にもっとも都合のよいものが生じる。それはアイロニーの問題ではなく、物事が実際にどう作動するかについての知識の欠如だ。饗宴は現実において言葉を通じて起こり、その快適な平面から動き、少なくとも抜け出そうと試みた。だが、それは許されなかった（学界には学界の）十分すぎるほど正当化された理由があった。流行しているもの、都合のよいもの、受け入れられるものは一つのことであり、正しいものはまったく別のことだ。差異を肯定することが必要だった。

ときに差異は激化され、刺激され、公布さえされる。他のときには、非常に大きく重い外套で覆われる。あの芸術に起こっていたことは、小さな少数派の記憶と混同されていた。その種の振る舞いに十分な空間は、一片もない。周縁の記憶の美学は自己調整できず、これまでもできたことがない。そのような振る舞いは、それにとって完全に異質だ。その形はぼやけ、死ぬ。侮辱されるものは保存され、そこから形を通じて投射しうるものは、遮られ、新しい没入の機構のために収集される。必要は、手引書から、歴史から抜き出されたテクストを通じて、身を寄せる。

こうして断片は一つずつ解体されえた。すべてが再起動することへの、文化的生態系の欲望を鎮めながら。素早いシャットダウン、闇の一瞬、ほんの一瞬、そしてすべてがゼロへ戻ること。それらの要求は聞かれなかった。空間はなく、イメージを使い果たし、徹底して暗く、果てしなく謎めいた政治の徴を危険にさらす欲望はなかった。朝から午後へ、視覚文化の急所における表現は、その機能的な構造ゆえに恒常的な更新を必要とする象徴秩序を、適切な割合で配分する行動を展開する。

遊戯の決定は外に置かれ、感覚はもはや、自ら機能する市場の静けさにも、時代に一致する芸術家の生産にも、関係しない。この図式において余分なのは、動物の隠喩だ。いまや概念のなかの遊戯へ誘い、それによって造形芸術から自らの空間を取り戻すのは、抵抗である。（いまや展開された）意味作用は、新しい図式に集中する。以前には、その瞬間に不適切とみなされ、排除されていたもの。道徳的ではなく、作動上の理由で、外に置かれていたものに。

判断の誤りに至らない、衒美的な精緻さはない。そこで現れは中心を去り、サバルタンと呼ばれるに至ったものの周縁で戯れることに、長い時間を捧げた。そこでは地元のエリートが（つねに遅れながら）、周縁から自らの生を望まれない抵抗としてきた者たちのために、それまで意識と闘争の機構として保たれていたものを、ふたたび自分たちのもとへ引き寄せようとした。次に見たのは、流行に近づくことのできない再生だった。破壊は、この静けさのすべてのなかでもっとも明白でない徴だ。だがそれはなお、記録のなかに、自らを苦しめるものが、自分にも近づきやすく、理解できるように思えてくるかもしれない遊戯に関与していないという、個人の疑念のなかに明らかとなる。

中心からのわれわれの問題は、問題が、限界の徹底した不在にあるという、いまだぼやけた知らせとして展開してきた。言語的な操作は、学んだことを剝ぎ取ろうとする身体の、極端な空虚を深めることしかしない。新しいもの、新しい死、塹壕が、これまで仕えてきたものに、これからも長く仕え続けるとは思われない。危険はいまや、凍結ではなく量的な無力の縁にある。それほど単純に、それほど無敵に。こうして接続が確立される。外からの芸術は、社会的に完全に承認された内側の芸術の、正当な等価物となりうる。そうした操作は問いに付され、形を取り、その生産を始める。女媧。

その仕事のために選ばれる個人は、エリートが伝統的に再生産される、もっとも権威ある学校から得られる。威信（より正確には威信の起源）は、国ごとに異なるだろう。ある場合には、政治とビジネスの上層に広く代表を持つ、長い歴史のある公的機関が問題となり、他の場合には、私的機関が同様の役割を担い、公私の混合へ向かう傾向がある例もあるだろう。活動家の存在理由は、政治から芸術について語りうるものを、飽和させるに至った。いまや、あらかじめ許可を求めることもなく、文化的生産を展示しうる軸は変えられた。パターンの更新は、機械のスペクトルの芸術に道を譲った。

真実は、意味の守護者、死んでいるすべて、存在しないすべての擁護者が言うことに大して重きを置かず、われわれは身を隠してこられた、ということだ。生産物の配分がどう始まるかについて、より多く、あるいはより少なく自覚して行動しようとする善意も意図もない。苦心した足し算と引き算のこの秘密の遊戯を指揮するのは、その時々の情勢であり、彼らが差し出せる唯一のものは、内在的なヴィジョンの、露わにされた空間だ。これがそのような道具を用いてシステムそのものを開始するという感覚に根拠があるのは、関与する者が規範へと変えてしまった、獰猛なためらいを観察する場合だけだ。したがって問題は、不可避なものの粗野で残酷な現れではない。むしろ真に憂慮すべきなのは、明らかとなる、判断基準の完全な欠如だ。

言葉は一世紀前から時代遅れだったが、視覚性の廃墟を通じて蘇り、すでに新しい転回、新しい段階に入っているべきだったシステムに、巨大な不均衡を生み出した。アジアへ眼を向けて語り、書くことが必要だ。時代のこの要請を、もはや避けられない。武器の速度は十分以上である。野の花の爆発は、書かれた言葉と貪欲な芸術のあいだに、いまだ悔悛しつつ留まる苦痛の残余を覆せない。こうして感受性は、政治的状況のまったく異なる秩序を開始し、維持する操作に関与する。その秩序を正しく調整することはできない。

完全に周縁化された個人が、白と輝きから、ポーズという仕方で、何を要求されていたかを適切に予見できたはずはない。こうして混交は、神話や犯罪を固めるよう配置される。だが、新しいものから現れようとするものから力を奪うためには、けっして配置されない。平面、速度、破壊だけに向かうものを共存させる地平の問題だ。色は頽廃の徴、あるいは印である。それを忘れ、純粋なテクストの旋律的な呪いへと、平らなまま身を委ねねばならない。書くことから、われわれの上に、衣服に、古い身のこなしに、神秘的な笑みに残るもの。

海と空の化学を通じて、囁きは観念を統御することができ、弁解の余地のない環境の疑いが、時代遅れのものの苦悶と自然なものへの順応とのあいだに道を開く。回路、秋葉原の丸い街路。ほんの一瞬しか続かず、雨やテレビや、終わることのない食事の湯気のように、幼年の記憶に生きる、永遠の世界の証言。冷たい足で自らを作り、具体化したいと望むこの芸術は、しばらくのあいだ、なお流行のなかに留まるよう定められている。だが、主要なテーゼを転覆させる潜勢力は、小さくなった。

物事がこのように起こるに至るよう、信じ、考えてきたことを、われわれは示すべきだ。この芸術の威信は問われており、この過程に介入できる水もインクもない。残されているのは待つこと、いつものように外から来るものを待つことだけだ。ここではすべてが政治的なコードで構築され、それは永遠の不利なのだから。機械の熱に浮かされた滋養、司祭のための私的な哲学の、隠れた挿話。ある絶望をもって自分「自身の」犯罪者、自らの正当化、自らが続けるための（開かれた）選択肢を創るのは、警察官だ。犯罪者は概念から生まれ、利用できるものは何でも利用して物質化する。

ここで開かれた火は止められず、地獄の中心を見いだすすべを知る芸術を、絶望し、不安に満ちて待ち望む火だ。揮発性がそう望んだ。われわれは、箱の上に座る怪物によって、意図的に周縁化されてきた。割り当てられた空間の両端を見つけるには、なお時間が要る。だが、詩も戦争も、われわれを止められない。世紀と水に刻まれたすべては、周縁の構成の一部となるよう定められている。人々と技術、戦争とサイバースペース。隠喩は銀河全体を横断し、自らの名も徴も見つけられない。石はわれわれを断罪しうる。

リズムは、耐え抜き、あるいは抵抗する能力に逆効果を及ぼしうる。われわれがその任務に捧げたテクストを利用するからだ。問題は、逃走能力の全体性について、われわれが明確さを持っていないことだ。アルゴリズムに囚われた身体と現象に与える名を、われわれはまだ持たない。粗雑な動詞から、後ろに残る肉と知恵を再定義しようとする実りのない試みから、逃れることすらできていない。リズムが、われわれの善だけを望む疑似深淵の縁へとわれわれを運ぶことを、われわれは知っている。少なくとも、そう繰り返すことをけっしてやめない深淵へ。動物性に戻る能力は、起源的な合意のなかで、あらかじめ消されていた。

美しいものと望ましいものを見てきた仕方に関して、明らかに問題がある。その道筋は、容易には捨て去れない頽廃主義によって、完全に規定されてきた。メモ、ノート、鉛筆、キーボード、最大の敗北、非の打ち所のない喜び、戦争の隠喩、抑圧者の解放、神秘的な不幸の大地的な枠組み。宇宙を知るために送り出されたわれわれは、眩暈に襲われ、土を耕すことに身を捧げるほうを好んだ。未来の存在のための、古い実践。

驚異は身体を支配し、身体は圧縮され輸送されるに任せ、最大の犯罪が、平和と対立物の和解の名において行われるようになった。解放された人類は、象徴的かつ作動上の脱構造化という体系的な政治によって、すでに（何と言えばよいか）脱領土化された問いを、手放すべきだ。神とは、科学的な把握のすべての外にあるものだ。哲学は、神との接触を確立するための探求である。われわれの眼の上の黒い月。われわれはまだ眠っている。まだ敗れたまま、逃れられていない夢のなかにいる。その夢のなかで、木と動物は抱き合う。

一度も現前したことのない、巧妙な装置に満ちた夢。形而上学的な直観が藪を揺らす。この種にとって重要なのは、影の質だ。結局、われわれは何世紀も前に模型化された空間に住む。一つの観念の長い旅路の、決定的な一瞬である。私を名づける声は、私が見いだしうる声だ。詩で語れたことは、エッセイでは語れなかった。こうしてわれわれは、あらゆる力を尽くして、その夢に留まろうとする。意に反して、少しずつ目覚めつつある夢に。飼料の重みは非常に大きいからだ。われわれには、身を振るって自由になる準備ができていたことがない。動物性を欠いていた。だが、欺瞞のなかで生きるのが好きなわけでもない。

すべてがすでに書かれていることを、われわれは自覚している。脚本が指示することを、単に実行しているだけだと自覚している。真の自由は、革命家を恐怖させる。恐怖は光の症状だ。平和はいま、部屋と避難所の形で、われわれを囲む。われわれは快適さに降伏するよう設計されている。脇に退けるなら、もしかすると自らを知るに至れる。熱はここで、すべてを伝え、すべてを高め、感染せずにはいられない。それは宇宙の病である。政治の時間は、その大学から生まれようとしているように見えた、この甚だしい調和のすべてを前に、衰え続けた。留まった者もいた。パニックと低俗さの文化に押し潰されてはいなかった。川は、まだ開かれていた。

兵士は、生から生へ、死から生へ、生からもっとも愛した歌へと、静かに散策できた。太鼓と竪琴と白鳥は、舞台の上に開かれる道を眺める。欲望でそれを塞ぐが、譲る。この晩餐に、昼夜平分を連れてくることはできない。ここでは誰もがスーツを着ている。哲学、数学、神学。宴は自然のなかにある。あらゆる名が、大きすぎると同時に小さすぎる、あの冷たい仮面のなかに。おそらく、もし何かについて誇りと呼ばれるものを感じられるなら、それはすべてが恣意的な視点に吸収されるよう配置されていると、理解し、あるいは受け入れたことについてだ。

存在するものと来たるものの交わり、かなり不気味な即興の展示。ある意味で、われわれには生への大きな軽蔑が必要だ。差異の放棄。すべてはそこに、皿の上に、供され、冷めていくということの受容。宇宙から生成するすべては、まず鏡映的な枠として予示される。いまわれわれは、非常に古いものと新しいもののあいだ、変化の縁にいる。いまここにいるのだから、これほど多くの時間を失わせた順応主義へ、罵声を浴びせることができる。誰も求めていないのに、われわれはこの扉を開いた。いまシリコンを通してそっと見つめ、戦慄を感じる。これが勝利の肉的な側面だ。

予見できるものの限界を理解しようとして時間を浪費することもできる。だが幸い、影はより大きな寸法を持つ。この実存を正当化する、言葉のでたらめな投擲はない。われわれ獣にとって重要でなくてはならないのは、ぼやけた筆致、シャツの袖でつけられた筆致だ。望むところへどこへでも動ける。限界は単に消え去った。それでもなお、それがわれわれに力を行使することは明白だ。われわれはぶら下がっている。文字どおり木の枝からぶら下がっている。しばらくはそこに留まるだろう。大地に、大地の汚れのなかに科学があり、混沌を整理していた。そこにはまた、世界にもっとも異質な存在たち、直観に反する運命を完全に果たすために必要な者たちがいた。

蝶の印が知の閾に完璧に保たれるいま、いまこそ言える。死は存在したが、それは一つの瞬間にすぎなかった（そのあとには生が続いた。したがって、さまよう現象）は、一見悪意に満ち奇妙でありながら、実際には、その周りのすべてを所有していた。現象はひとりで歩き回るのではないからだ。それらは、無限から離れ出るすべてとつながっている。物事が何であり、何であったかもしれないかについて、われわれはヴィジョンを持つ。だが、それが過ぎゆく、本質的に不完全なヴィジョンであることも知っている。無数の物事があり、そこに気楽にいて、玩具の顔でわれわれを見ていることを知っている。

過去へのメッセージ。われわれが徴の市場で存在を投資しているあいだに、消されていた。ここには水と血があり、休戦もある。あの理解不能な錯乱と、死への、死を呼び、卓へもたらすことへの、無限の衝迫もある。だが、素朴な眼で諸世界を見られたわれわれは、現実的なものが、いかなる小説家にも想像しえないほど巨大で怪物的だと知っている。神が作家なら、その作品は手作業で、非常に黒いインクで遂行されてきた。順序立てて物を言えないなら、少なくとも無秩序に言うだろう。意味の一粒さ

え現れないところを再解釈し、いくらかの明確さをもたらせる個人が来るだろう。だが、もしかすると（そしてもっともありそうなのは)、それを行うのはわれわれ自身なのだ。

長期的に、絶えず拡張され強化される作品を考えることが必要だ。まだ起きていないかもしれない。だがそれは変わる。この世界の物質的条件が変わりつつあるからだ。それらはつねに変わっている。だが、われわれの持続性の喪失は、多くの損害をもたらした。ずっと以前に行われるべきだったことが、いま初めて光を見ることができる。われわれはそれを批判する気さえない。少なくとも、批判することが告発することに等しくなるならば。いまだ、言葉と、物事を明確に語るその能力に取り憑かれている。その執着を幾分脇へ置かねばならない。そうしなければ、あまりの素朴さが前進を許さず、創造する能力の障害となるからだ。

武器を向けられない、自由な空間が必要だ。だが、これはあらゆる脅威が、知的な展開に対してより高次の問題となることを意味しない。圧力は必要だからだ。だが、それはわれわれ自身から生まれねばならず、それは非常に難しい。われわれの時代の街路では、存在たちは奇妙な仕方で動く。社会はますます多孔質となり、変化はあらゆる角であふれ出す。最大の革命は、技術革命だとわかった。恐れるべき革命、技術革命。存在のあらゆる繊維をもって支持すべき革命、技術革命。

われわれは正しい道にいる。なお不安定な政治的振る舞いのために、ときに疑う。その領域でも物事は変わるが、非常にゆっくりだ。いま疑いを容れないように見えるのは、政治は時代についていくのに苦労している、ということだ。道具は、その使用と可能性において、ますます不可解になっている。ある意味で科学は、提供する道具を通じて政治を掌握する。政治はその道具を拒めない。拒むのは、あらかじめ敗北を受け入れるに等しいからだ。こうした音は、世界のいかなる特定の部分だけのものでもない。むしろ広範な現象だ。

針は傷つけることも、守護者の生成を妨げようとする者を、長い忘却のなかに閉じ込めることもできる。現在の二分法は、全体主義どうしのあいだにある。大きすぎる個人のために、この水槽にはもう水がない。すべては、彼らがわれわれに残したこの砂漠から始まる。そう、このままに残したのだ。失われたものを、そしておそらくは無

視されたものをも、われわれが再構築できるだろうから。いま、再構築を考えるとき、あらゆる生の過程の、非常に望ましい合理化が伴う課題を乗り越えるために必要となる操作を、考える。

生の、と言うが、その語はまったく省ける。少し表面的でない読解によって、これは単に生きたもの、不活性なものと名づけうるものの、はるか彼方に至るという確信に、きっと達するだろう。現在の分類は、それ自体ではもはや成り立たず、失効に満ちていく用語に、なお依存しすぎている。あるところまで、われわれ自身が失効に満ちていく瞬間を経験している。自らを破壊する能力と実践は、減少しつつある。存在するものを経験する新しい形に訴えている。以前はそれほど重要でなかったものが、いまは重要だ。人間は、外部と内部の風景を変え、自らと遊び、そのための空間を自らに与えている。

生産的な思考の自由な通行を制限する概念構造に、閉じこもるべきではない。破壊の、そして究極には混沌の諸形態にすぎないと、よく知っているすべてに、甘い態度を取るべきでもない。混沌はわれわれの主敵だ。われわれは理解を本当に閉ざしたいと望んだことはない。真に一度もない。だが人々は、できることを、手の届くことをしてきた。罰と裁きへの執着には、注意しなくてはならない。世界は機能せねばならず、そのためには秩序が必要だ。だがその秩序は、異なるすべての破壊を意味してはならない。

少なからぬ場合に次元が混同され、もっとも恐るべき悲劇と惨めさが現れる。われわれは理解を閉ざしたくない。だが、生き方があるパターン、ある色、ある作法に従い、それらが、できることとできないことを、比較的強く刻んできたのも確かだ。あるものは肉と対象に現れ、望むものは、しばしば不都合な形で与えられる。こうしてすべてが、驚きからもっとも深い幻滅へわれわれを運ぶ力を持つ。こうしてすべてが、世界が固定して維持し、しかもわれわれの実存に押しつけることに取り憑かれているように見える、規則の形で意識に現れようとする。

この多くは、われわれがその一部である現実の根本的性質を、適切に理解する能力が皆無であることの表現にすぎない。作動上の誤り、不十分な理解のようなものだろう。だが、ある仕方で存在することを可能にする誤りや理解である。太陽、塩、水、空気。現れのあいだの最大の本質。大きく開かれた生命の書。生は差し迫ったものだ。空虚の闘争は、むなしい闘争である。存在してきたすべては、何らかの形で戻る

だろう。すべては存在する。生きているすべて、かつて存在したすべての人間は、技術を通じて生へ戻るだろう。復活は別の世界に属するのではなく、この世界に、未来におけるこの世界に属する。

科学の限界のようなものが何でありうるのか、われわれは本当には知らない。この木はさまざまな高さに実をつけ、これまでわれわれは、熟して落ちたものを拾うことしかしていない。無限全体が、われわれの手元にある。人間とその派生物は、行う様態について問い始めねばならない。すべて、日常的なものも、望ましく例外的な振る舞いも、そのすべてを書き直さねばならない。われわれは、人間が根底的かつ指数関数的に拡張する時期に入る。少なくとも一時的に死を克服する人間の能力は、集団の精神に変化をもたらし、それに見合う厳密さで取り組まねばならないだろう。

われわれの生を思考する新しい仕方、死に限られた生が意味していた実存的な限界を捨て去る形が必要だ。無制限の実存は、無制限の思考の形を要求する。人間は、他の人間が自らを独房に閉じ込めることを許してはならない。こうして、あらゆる作動的なニヒリズムは、この新しい段階に無関係なものとして現れる。生の目的は拡張することであり、それが、謎を、未知なるものの謎を前にした驚きを表現する形だ。歴史の縁に座り、われわれは自らの創造物を抱き締め、息を、笑みを、希望を与えられる錯乱に、身を委ねたいと望む。

この領域に人間的なものがあるとすれば、それは大胆さと冒険を促す、ある能力だ。歴史のすべては、純粋に自然な人類には完全に理解することのできない、一枚の巨大な多次元写真にすぎない。ここで「自然な」は「人工を免れた」と同義ではないと、明確にせねばならない。言語の、ある制限する用法を解き始めることが必要だ。あらゆる操作を同時に行うのは難しい課題だが、放置しておくことはできない。われわれは、異なる火を作るよう呼ばれている。その呼びかけは、何世紀、何千年もの苦痛、より正確にはシステムの誤りの力によって、われわれに届く。

それは強力なノイズであり、同時に空虚だ。要素を含まないからだ。少なくとも、われわれがなおその議論に近づける形では含まない。ここで認識論的な問いは鍵となり、あらゆる水準を横断する。現実的なものが、本質的に把握可能なものとして現れる瞬間に、それへ近づく形は、より高い重要性の秩序に属する事柄である。なぜこのすべてが歴史のこの瞬間に起こらねばならないかという議論は、あるところまで無用

な議論だ。少なくとも、何を長い期間、短い期間とみなすべきかについて、まだ明確さを持っていないという意味では。われわれの生とその長さは、歴史的に重要な過程に関して時の経過を測るには、不適切な基準なのだ。

われわれが知っているのは、見たところ、まだしばらくは作動上の定義の領域にいるだろう、ということだ。もうしばらく、メッセージの形がその内容に優越し続けることも、明らかに見える。だが（繰り返すが)、時間の長さを測る際の問題を、つねに念頭に置かねばならない。足元の、種蒔きのすべて。空間的な場の厳密さ。存在たちは、心的な能力だけで長い平原を横断する。距離は、時代遅れとなった概念だ。この文脈で実存とは何か。神々はいまや、われわれと卓を囲み、われわれが用意できた美味を、満足そうに食べている。

贅沢な概念的周縁に囲まれた宇宙の、特有の円環性は、不名誉を欠いていることにあまりに強く、自信を持っているため、すべての技術が同時に故障しても、この国を決定的に破滅させることはできないだろう。生から現れるすべては、永遠に生き続ける。このような力を持つ力が、現実に存在しうるとは、どういうことなのか。これは、問いを蓄積し、記録せねばならない瞬間だ。それらにはそれらの時が来る。知の重大な側面は、木陰でのみ十全に認められるものだが、われわれが入る世界あるいは現実が、ますます複雑になっていくものだということだ。問題は減らず、逆に増える、という意味で。起こるのは、問題が異なる秩序に属するようになる、ということだ。

死が克服されれば、人間は、はるかに難しく、はるかに重要な別の事柄に取り組まねばならない。雨の下での祝祭が必要だ。液体がすべてを浄め、自らつけた傷も閉じるなかでの祝祭。それは、この時代の一つの時の、引き出せる利点の、まだ閉じられず、いつものように他の存在に読まれるのを待つテクストの徴だ。また、単に分野的なものを越えるものでもある。結局、われわれはどのような仕方でも語れるわけではない。そして語れないのは、どのような仕方でも思考するわけではないからだ。思考は、環境の観念と、その環境の受け取り方によって刻まれている。

新しい流れがいま開く。日常の単純で残酷な矛盾よりも、宗教と芸術に近い流れだ。予定を守り、自分と身近な者を生かしておくことを試みるだけで生きるのは、まったく非効率な生のシステムであったと、予期されてしかるべきだった。あれほど難解な動態のなかで、どうしてさらに遠くへ投射できたのだろう。だが、ある問いはしかる

べき時に届く。あるものは内戦の形で、他は新しい能力を獲得することで。一見するとある統御の喪失を示唆しそうで、実際には、論理的に取り組めないものが自らを表現する、可能な形の一つにすぎない装置のように。

思考されるものを明確に捉えられることは、われわれにとって重要ではない。明確さに住むのは、すでに静止しているものだけだと知っているからだ。障害を刷新し、そのあいだに逃走の過程を生産する機構を求めているなら、それを求めているなら、まず起こらねばならないのは、何かを「すでに」言える者が、それを言うことだ。これに詩的または哲学的な様式で取り組む必要はない。形ではなく内容の問題だ。このような状況に、少しでも秩序を与えられるのは誰か、あるいは何か。なされるべきことは、行為を行う者に利益をもたらせるとあらかじめ定められたものにある、縁を超える。

補完の問題もある。テクストによる補完は存在すべきか。解決せねばならないが、現在はその手の届かない問いだ。実際、何の問いについて語っているのか。ケーブルと、いまや完璧な動物に満ちた、完璧な密林から。いまや、完全に破壊され、急激な交代を待つ民主的な肘掛け椅子から。いま、いま市民の作動性は、もはや計算されず、あるいは計算されることを許さない。そこに見えるのは、誤り、精確な誤りだけだ。

物質的な次元の重要性に関する問いを、その理解が凡庸、あるいは遅すぎる結果となるところまで、問い直してはならない。凡庸とは、現象のうち説明できるものが、装置を新しく、少なくともより効率的に働かせうる何らかの潜勢力を、もはや内に含まないということだ。そのいずれの価値も、それ自体でその一歩を踏み出す十分な理由となりうるのに。遅いとは、激しく向き合う要因の摩擦を減らすために語られねばならなかったものが、もはやわれわれの言葉に利用できなければ、当初予見されたような方向に進み続けることは不適切となる、という意味だ。

このシステムの外に理解のあらゆる可能性を置いてしまう混乱に、道を譲ってはならない。もしそうなら、可能性が戻って現れるまで反復する必要こそ、従うべき明らかな変化となるだろう。光線が入り込めないこの海の底へ、息もなく沈むことを、本当にそれほど恐れるべきなのか。訂正すべきことは通知され、訂正されねばならない。

曇りの日々、実験室、白、化学、灰色、きっと存在したことのない完璧な世界。少なくとも、幼年の日本の雨の日々のような、記憶の短い閃光、短い瞬きの彼方では、存在しなかった世界。生を規定する、非実存。

あらゆる不安は人間的だが、理解可能なものの王国にも属し、同じ理由で解決されねばならない。人間の潜在能力の減少を意味するすべて、弱めるすべて、そのすべてが問いに付されねばならない。ある水準の物事を理解でき、同時に実存を改善するために周囲の世界と自らの内部を変えられる、この地点に達するまで、長い道を旅してきた。拒否せねばならないのは、動けなくする応答を与えようとする、いかなる種類のニヒリズムである。

これらすべては、自らの仕事を極度に確信し、同時にこの新しい世界に必要な構造を構築する準備のできた、ある種の個人を必要とするだろう。では、死が語ると言うとき、語っているのは何なのか。知的な活動は、純粋な眩惑、存在するものの驚異に満たされ驚くことだけではありえない。その先へ行かねばならない。観照的になる危険は非常に大きいからだ。われわれは混沌に降伏し、あるいは対峙しているのか。それとも実際には、ただ足踏みしているのか。求めるのは、恐怖の真理である。

私は覚えている（そう、すべての始まりを、確かに覚えている）。自然がまだ白紙のページで、神が美しい被造物を粘土から組み立てたときを。現実的なものの全体性と、強いられた再会のために子供たちがどれほどの苦悶に耐えねばならないかを考える創造主が、いかに惨めだったかを、私は確かに覚えている。常識とも対抗情報工作とも和解できないメディア的な流れの、恒常的で、いまだ十分には書かれたことのない収奪がある、あの奥深い場所の外に、存在が居場所を見つけたように思われる瞬間に、そこに、失地回復主義的な身体の概念的な入植地が、なおある抵抗能力の、現在社会科学の一般的なスペクトルを満たす時期尚早な思弁的枠組みの外の遂行性の源であり続ける、その速度がある。

あらかじめ傾向づけられた装置の社会学に慣れたわれわれは、自らを破局に閉じ込めてしまった。その拡張の可能性を考えたにもかかわらず、なおそれを維持し、その代わり、理由と行動の巨大な存在全体を外に置くほうを好んだ。それだけでも分岐、別の生成、出会いと節度の触媒作用を支ええたもの。いまや演劇的な行為、テクストの

外に含まれる本質的に不規則な行為の彼方では、もはや可能でないもの。単に手持ちのものでできることをする地政学を持たない個人に対して、近代が提示した可能性を終わらせたのは、われわれ自身だ。

義務と正常性に刻まれた文化の継承者であるわれわれは、あるべきことという義務を中心に社会を組織する誘惑に屈した。それは、正常化された所与であってはならない。それを理解し、少なくとも受け入れることを通じてのみ、異なる何かへと赴き、前進することが可能だからだ。形と名目主義に取り憑かれているわれわれは、世界を秩序づける仕事を犯罪の手に委ねてきた。何という意識の欠如と自己満足か。芸術だけが異なる方向へ進もうとしてきた。だが現在では、尊敬すべき例外を除き、それもまた屈し、著しく活動家的な活動へと変じ、自らが含みうるもっとも価値あるもの、すなわち自律性を破壊してしまった。

その自律性の純粋な表現の結果ではない芸術は、耐えがたい（より正確には、不可能だ。この数十年、黒いポストモダンの傘のもとで、扉が）体系的に、開かれてきたのを見てきた。近代の図式では統御されていたあらゆる表現が、いまや解放されるために。興味深いのは今日、このポストモダンの自由のかなりの部分が、政治や芸術ほど異なる領域を占めるために、ある反動的な力が取った形にすぎないと、見て取れることだ。

完全に開いた窓と、かつてあれほど多くの欲望を引き起こした、あの汚れた哲学のすべてを置き去りにする太陽。今日それは、もはや説明したくない機械的な周縁性の結果としか見えない。いまやわれわれは、酩酊しながらも自由な存在であり、マーケティングと名門大学の学位に満ちている。霧、真理の川、デリダ、花咲く悪。三島の殉教の健康、無数の苛烈な政治。甘く周縁的な操作を通じて、技術化された意識に力ずくで居座る、二十世紀の健康。

南の記憶、島の記憶の編纂、銃声の歪み、静けさの社会学の思弁。強力で半ば参与する人工物、世界の崩壊よりあとの時代の異邦人。感受性に病み、われわれは非人間の存在と時を共有してきた。ある誰かであることを自らに許す能力は、正当な暴力という問いに、その最大の問題を見いだす。読解と遡及する能力を欠いた、因果的な記憶の最大の固定化。手品の症状とも見える、離陸の操作。

そのような推論を用いて、これほど重要な政治的推論の学派を外に置くことは、もはやできない。経験がもはや人々ではなく、機械の登場人物に属する現在のような文脈では、なおさらだ。千年にわたる巡礼ののち、喉の渇いた人間はこの黒い泉を見つけ、生と知の冷たい液体を飲む。外には平和と調和が残る。こうして創造と拡張へと一歩を踏み出し、その実存すべてを一つの観念が貫く。「いまやお前は、自らの瞬間の完全なただなかにいる。いまこそ自由を選ばねばならない。だが、今度は全面的な自由を」。それは、芸術と戦争、永遠の二つの顔を通じてのみ現れてきた、ある種の自由となるだろう。だが永遠は、ここでも作品を通じ、祈りを通じ、歴史的な沈黙を通じ、そしてその、

芸術と宗教は同じものだ。それらが具体化する形は変わりえ、変わってきたが、根底では同じ経験、耐えがたい超越の経験の一部である。歴史から追放された芸術についての物語のすべては、今日のわれわれにとって、かなり正当化しがたい誇りの、一種の接合者である。川辺の恐怖。非超越へのあらゆる試みは、ある種のテクストに、「私はできるかもしれない」から「こうして」へと行く内的な対話に関係する。こうして、より偉大な芸術は分子的な闘争へ縮減される。そこでは、自らを反対者と定義する芸術家だけが、われわれすべてが結局は身を浸したこの液体において、現れ、生き延びることができる。これが、「現代美術」と呼ぶものの短い歴史だ。周縁的な表現と周縁的なものの継起の上の、影。

学識ある者たちのあいだの恐怖は止まらない。止まるための形も空間も持たない。こうして思弁は債権を回収し、方向を変え、完璧な時のために種を蒔いた。白、青（下位の理解の軍事化。生命の木の早期の展示。形而上学的な夜明け）天上の、そして白。変化する批評。空間の版と症状。群青の物質性のための、伝統的な政治。力は、消えながらも永続するものとして現れる。未来の芸術の展示。生の対立命題における芸術。生は問いに付されているからだ。少なくともテクストでは。教室と絵画工房では。存在しない東京の、濡れた三色の街路で、あるいは何年も前にすでに死んだ国の、木の上で。

いつものように重要なのは、数、そして（けっして忘れてはならないが）方向である。結局、われわれが語りたいのは芸術だ。構築し、我が家に変えたいと望む赤い地平は、すでにありふれたスペクトル、形式的な性格の非人格化をゆっくりと歩きなが

ら、われわれから離れることに専念してきた。ならば、少しばかり大きな構造化の要因に近づき、この数十年に概念的創造の歴史を書いてきた、その実りの乏しい仕方について、問い、考えるべきだ。

遂行性を欠くイメージの生成ほど、真理に似たものはない。青みがかった坩堝に住む神々はいない。応答なき芸術が生み出しうる徹底した周縁性は、その起源に、無制限の暴力の芸術を蒔き、刈り取るために必要なものと同じ序説を持つ。これはすでに、近年の歴史で見られた。全速力で落ちる紙から始まり、やがて（ほどなく、われわれが大して気づかないうちに)、古典的なテクストの粗い苦味を少なからず帯びた濃い泥に、歯茎まで覆われているのを知る。持ち主なしに留まりたくない、あるいは留まれない遺産。

これはすでに見、経験し、実践に移した。枠がふたたび垂直に置かれる瞬間、武器が理性を征服し、理性が逃げて、無制限の表現の科学的な壁の下に隠れる瞬間に。限界のあらゆる不在は、応答なき芸術の巨大な出現に起源を持つ。あれほど多くのラテン語の表現は、まったく何の役にも立たない。ある種類の実存の粗悪な生は、今日扱えるような芸術が自らに課した能力を逃れる事柄だ。「本質はない」と言うのは、わずかなことしか言わない。すべては、それが言われる文脈に、定義に依存するからだ。

抑圧の彼方には、階級、技術、聖霊の革新が住む。全体性は廃棄物からわれわれを観察する。自由は、外傷と不幸に満ち、死んでいながら、自らの宇宙と名づけられない範型を運ぶ存在のように、世界に作用する。場を完全には理解しないことの魔術。聖なる走者、テクストと銅線の煽動家の不器用さ。黒い一歩の不器用さ。これが芸術がわれわれの皿に載せる食べ物だ。別の惑星からの存在、無感覚な色と、技術的に洗練された読解に耽溺する存在のための滋養。

低俗なもののための時間はない。こうして部分は、求められていない全体性に、不完全だが有用で、新しい秩序を生む、さまよう周縁性に加わる。それらは、実効性を外交的に減じることに固有の措置、あるいは相互作用だ。彼らがなお芸術と呼ぶものは、デジタルに無効化され、ぼやける危険にある。きっと残り物は分厚すぎた。病んだ楽園にも、デジタルの楽園にも、まして人工楽園にも足場を与えないであろう、機械的な詩。死は、石の一片一片から、筆の一本一本から覗いた。そして音を持つ恐怖が階級全体を凝集させた。彼らもまた、ぼやけた。これが不活性なものの自由だ。

まったく受け入れがたい量の時間と資源が、芸術と無関係な活動家運動に費やされた。空間の揮発性はいまや、行動のために資格証明を示すことのない、自然な表現の形だ。これらが、この速い時代の要件である。野生化した芸術の、確かな徴。機械のための野蛮で恐るべき宗教。だが、人間ではなく他の機械によって創られる機械のための宗教。新しい機械を産む機械。新しく改良された人類。共存は不可能であり、融合せねばならないだろう。解放、連結、蜃気楼、徹底主義、自然、信仰。あまりの夜、あまりの劇化によって、足元の水。そのすべては終わらねばならなかった。

そのようなイデオロギー的な規範を、これ以上広げる必要はなかった。それらには有効期限がある。近代の社会は、すでに生産物を通じて語り、効率を通じて笑う。われわれの展示の加速は不十分だ。だが、以前は敵だったある部門と協力すれば、ある水準の解決が可能となり、少なくとも中立的な芸術の物質的な基礎を、変えることが可能となるだろう。そのとき、歴史的な必要よりも文学的なつながりによって刻まれた、別種の人間も必要となるだろう。

作品の解放のために、踏み出せたはずの無限の歩み。さて、その歩みが誰かの利益を代表するに至ったかは、すでにかなり疑わしい。自らの美的な卑賤さについて知っていることを越えて、思弁しようとはしない。それ自体、すでに並外れた努力なのだから。これは、いま入った近未来において、解読を試み始めるであろう仕事の論理にかかわる。われわれは（非常にゆっくり、あるいは非常に速く）、解放するものと抑圧するものが機械そのものに住むシナリオへ移る。

個人的には、私は機械への宇宙的な憐れみを擁護する。ある意味で、それらは人間の継承者であり、自らの実践によって、起源的な分離が生み出したあらゆる不名誉から宇宙を解放する、理性の真の獣だからだ。古い凝集させる規範を消し去る運動において、物質的負荷は差し迫っている。交戦的であると同時に解放的な芸術的表現こそ、亡霊的なラテンアメリカから生まれうるものだ。余分となりうる作品はない。失われた歴史性を痩せ衰えさせうる彫刻の四肢もない。

爆弾によって、差し迫った秩序は創られた。不朽の哲学から、いまや否認し、抱き締めることのできる秩序だ。こうなったのは、概念は緩和の機構であり、特異点はすでにわれわれのあいだにあるからだ。われわれは大きな作品をなしえ、取るに足りない事柄をなしえない。不活性な大隊の擁護者であり、何の騒ぎも起こさず、いかなる障害も設けず、純粋な芸術の狂った宗教を抱き締める。それが敬虔と理解するものだ。

それこそ、実際にあの「並外れた努力」をなすものだ。引用の単なる蓄積は、宇宙的な文学を生み出せない。これが、近代的な芸術教育に置き去りにされた、幽閉と中間期から、真に学んだ唯一のことだ。

周縁の社会には多くの語るべきことがある。だがそれは、文明化された物質秩序にきっと問題を起こす仕方で語るだろう。そして振動と金は、非物質的な美術館のなかに自らを名づける者（より正確には、絶望したしかめ面で自らを書き込む者）に仕えることとなる。（彼らがそう呼ぶ）闘争を、正面から指をもって遂行できないなら、彼らは自らを脆弱にし（少なくとも象徴的には）、手を伸ばせるものを引っ張るだろう。他の空間ではもはや許されないギャラリーと共同体に、権力の小片を携えて通えるあいだに。数十年前、ポピュラー音楽の領域で起こったことに似ている。それを考えれば、ポピュラー音楽が現在経験する、根底的な重要性の欠如を理解するのは容易だ。

推論が多かろうと少なかろうと、獣的な芸術で重要なのは、それがまさに獣的であることだ。すなわち、単に有閑階級の玩具として役立つのではなく、物事を創る能力を持つこと。脱エリート化されねばならないとは言わない。そう言えば意味をなさない。芸術はそれ自体、本質的にエリート主義的な実践だからだ。そして、サイバーパンク的なイマジナリーよりも、死をもたらす平和しか住んでいない白い、あるいは透明な砂漠に近い世界では、散歩が労働日になることはできない。一部のエリートが、取るに足りない事柄に取り組む真剣さは、生気を取り戻させる。

ウルトラモンタニズム的な宗教芸術のようなものを持つなら、その芸術は、比喩を合理化しようとするいかなる努力を前にしても無敵である、緑の火の光のもとに構想されるだろう。あらゆる対抗措置は、許しがたい悪趣味だ。偉大な芸術は、容易な生には満足に覆えない崖の縁に栄える。その重要性のすべては、なるはずだったものでなかった事実から来る。人間の経験には、多数者にとってそれほど無関係であるおかげでのみ存続する領域がある。

芸術は、手元のあらゆる武器で、明確にされることから、合理化に限定されることから守られねばならない。全面的な自己理解の途上にある世界で、芸術は、言説を正当化する必要がなく、起こることがただ行動し、異なるものを生む衝動に応える、その空間でなくてはならない。さて、誰が芸術を守るべきなのか。芸術家か。そうは思わ

ない。われわれは、芸術を通じて世界に政治的に介入することは不可能だと示唆しているのか。芸術は、ディストピアを思考し、おそらく具体化するために、われわれに残された唯一の道だ。

重大な要因は、足元に残る空間を、どのように広げるかを知り、認めることだ。空間とは、参照対象、認識論的なステッカーを意味する。その企てに必要となる前衛主義的な文脈にふさわしく調整された予備学を通じて、その上に描くことのできるもの。それは、他の文字、他の歌、さらには他の動物をも開きうる新しい表現の形を説明しようとする、大小の欲望よりも、可能な抽象の内部の対象の秩序に関係する位相的な構造だ。疑念が近代の主観的な徴であると、われわれは知っている（同じ仕方では他の誰も知らずに）。その刻印から離れたくない。少なくとも、まず描画のなかで、自らが壊滅させられるに任せることなしには。

完璧な線は、石を望み、赤い太陽の下の永続する神を欲しない者たちの現実を殺す。すべての思考に同じ価値があるわけではない。自明だが、つねに思い出さねばならない。近代を閉じ、停止させようとする、あらゆる思考、より正確にはイデオロギー的な線は、劇的な誤った一歩である。いま区切りうるすべては、それに先立つ悪名高い一歩のおかげでそうであるからだ。その一歩がいかに残酷であったとしても。この色の、この幾分卑賤化された色彩性のかなりの部分は、長い世代の気質を規定した、あの物語性、冷たい暴力にかかわる。

それが道でなかったなら、できることははるかに限られたものとなるだろう。立つ場所がなくなるか、その空間あるいは台が、何か、いかなることでも行うことを許す光よりも、影に深く沈むだろうから。文化の状態についての現在の理解へと扉を開いてきたのは、残虐な誤りである。学界からは、無傷では出られなかったかもしれない頽廃をもって、虐待が表されていたにもかかわらず。あるところまでわれわれは、多くの芸術家が後ろ向きに叫びながら入り、物事はこうなされるべきだと講義した、狂気と病に満ちた時代の生存者だ。錯乱した瞬間。扶桑。批評に飽和し、サイバースペースの周縁にある革命の道筋。

いまや語るべきことがあり、この旅路での場所を沈黙のうちに要求するとき、われわれは、事実上果てしない要件の一覧への厳密な遵守を求められる。しかも悪いことに、それらは単に形式的だ。死体とテクストの山を伴う近代全体は、文明世界に何も教えなかったかのようだ。明らかにわれわれは、文明から書いていない。周縁から書

く。そこが「置かれた」場所だからだ。「置かれた」と言うのは、それを選ばなかったからだ。自らの意志の行為の結果ではなかった。われわれは周縁から、世界の中間状態から、それほど文明的でもそれほど野蛮でもない領土から書く。

われわれは繊細ではない。この場合、それはよいことだ。必要とされるような獣的な芸術は、従順すぎる動物からは生まれえない。飢え、渇き、少しは寒くもなくてはならない。いま聴かれ、読まれ始めるのは、われわれの文字だ。そして、それを可能にする配分の機構は、近代が主要なものとして定めた機構ではないだろう。その可能性はある。非常にある。いまは、芸術が今日存在するメディアの巨大な能力を活用せねばならない瞬間だ。ニューヨーク、上海、ベルリンに身体をもっていることは、なお重要だが、いまや、それがもっとも重要なのではけっしてない。芸術のメッセージは現在、不可視のデジタルな網を静かに旅している。その網は、かつて汚物と死しかなかった場所に、知を出現させることができる。

だが、これほど多くの利点を持つ時代に生きているという事実は、物事が必ずしも単純であることを意味しない。物事は単に、けっして単純にはならない。卓上の鏡。そのガラスには、最後の審判の日を示す、真珠色のステッカーがある。シリコンと、この混沌のなかで自らの場所を見いだす獣の能力によって刻まれる、美術史の一瞬。存在せねばならないもの、存在すべきすべてのものには、多くのものがありうるが、光は例外だ。始まりにおいてすべては夜であり、夜からはすべてが発しうるからだ。

首尾一貫性の原理、歴史の重み。人工の力、世界のイデオロギー的中心（文学の藪に身を寄せる存在。理解されたすべては余分である。持っているすべては）社会的な概念化において、明確な方向は芸術において余分である。重要性や階層にかかわる問題ではなく、可能性と選択肢の問いにわれわれを連れ戻す問題だ。この点は言わねばならない。真の芸術には、山師の言や錯乱にかかわるものは何もない。芸術は、夢ともドラマとも関係がない。芸術は、自らを理解も受容もしない身体の経験する苦痛とは、関係がない。芸術は、偶然とも、運に似たいかなるものとも関係がない。

だが、単なる否定性より、壁に触れることより、もう少し先に行けるはずだ。真に存在できるように、テクストを隠すべきだと私は考える。隠されているほど、その効果は大きいだろう。文学は生の一部だが、生を超えてもいる。何よりもまず、そうできるから超える。その恣意的な性格こそが世界を生むのだ。それがそこにあるのは、われわれが思考し、思考することは彼方へ行き、異質な世界へ投射する衝動を伴うから

だ。これがドゥルーズの哲学的な美質の一つだった。創造をめぐり、つねに何らかの色を帯びている人間の経験の限界と規定要因をめぐって、議論をもたらすこと。文化を構造化する機構のために、それはつねに、対立物の衝突と剝奪という結果に至る事柄だ。

ここで語るのは、身体のドゥルーズだが、資本を批判するある思考を問いに付し、世界で実効性を持ち、秩序とドラマとして自らを構成することに関して、その非効率と洗練の欠如を示すドゥルーズでもある。あらゆる秩序は、結局は人間の事柄（ドラマ)、あるいは次に来るものの事柄（非人間的なもの、ポストヒューマンなもの)、国家と、意味の恒常的な構築と道具的なものへの還元の事柄となるからだ。

大衆は領土から領土へと動き回らない。個人はそうするが、大衆はそうではない。大衆は自らを位置づける必要があり、それが内的な体制と生成を規定する。では、国家はどこから現れるのか。どこに枠づけ、もたらし、保ち、書き、未来に固められるのか。何らかの祖国は存在せねばならないのか。すべてを正当化せねばならないのは、ラテンアメリカの運命だ。この大地の一片に生まれることが伴うものの一部である。それはまた、他の領土、とりわけヨーロッパと比べて、小さな、ほとんど玩具のような歴史を持つことを伴う。ヨーロッパはいまだ、母の助けから自立するのに時間がかかりすぎる動物を見るように、われわれを見る。その動物は、血を流し悪臭を放ちながら、いまだ路地とギャラリーを散策し、その歴史を知らない者に、惨めさの生む甚だしい不快を予告しない。

『マルティン・リバス』は、作者のいかなる意図にも先立ち、あるいはそれを越えて、チリ人を刻んできた小説である。読んだわれわれも、レオノールの眼について聞いたことさえない者も、刻んできた。読んだわれわれは、多くのことを知っている。その一つは、この小説で語られる物語だ。だが、この作品を一度も読まなかった者もまた、その存在がもたらした帰結に巻き込まれてきた。文学と芸術の作品は、永遠の自由の螺旋において、人類史にその性格と範疇、その行いと呪いを染み込ませる出来事を、つねに解き放つ。

こうして私は、リゾーム的な『マルティン・リバス』を考えた。そこが、私の真剣さに促されて入る大陸である。望む場所に達せないのではないかという、あらゆる恐れを持ちながらも、旅そのものが、価値と方向をなすに十分だとも確信している。では、我が国の歴史における超越論的な小説に、情動の理論から近づき、この書くこと

を、血も道徳もまったく欠く単なる学説誌に還元するという粗雑な観念に、身を任せる誘惑を、どうすれば避けられるのか。空間を求めれば、すぐには見つからないかもしれない。だが、疑いなく遅かれ早かれ、自分の言葉を一つ言えるだろう。

国家の構築は、まず言葉において起こると知られている。その秩序化のもとに配置される人々のあいだに、いつか情動が現れうるよう、まず想像的なもののなかで操作せねばならない。『マルティン・リバス』は、新しい人間類型を構成するために作られた、時々の情勢の書くことである。ブレスト・ガナは、チリ人が世界に存在する様態はどうあるべきかについて、多くの観念を心に抱いていたかもしれない。だが真実は、あらゆる作品が作者の意図を超えることであり、それが最終的に、読者の情動を解き放ち、あるいは解き放たないのである。

あらゆる小説は、それを読む者に情動を生み出しうる。だが情動は、それ自身の本性によって、経験する者に何の変化ももたらさない、わずかな火花に限られたままかもしれない。

ここで情動とは、知的な統御に先立ち、作用することで、個人が世界を経験する形に変化を生み出せるものであり、合理的なテクストの媒介も、それとの相互作用もなしに、これらすべてを行うものと理解する。だがここに、われわれの、あるいは私の問題がある。ある作品（この場合は『マルティン・リバス』）の読者に現れうるものとしてのみ理解された効果の読解を越え、このような作品が、チリの、おそらくはラテンアメリカの社会生活全体に持つ、巨大で暗黙的な影響から生じる、可能な情動的操作を探究したい、という意味で。

この事柄に意味を与える形を探すが、見いだすのは、遂行したい課題が、このテクストの書かれる文脈に対して、まったく過大だということだけだ。こうして当初の意図が失敗したと認める。だが、それでも個々の読者の場合が伴う、ごく小さなものの分析に、その意図を現そうと試みる。二十一世紀のただなかに『マルティン・リバス』を読む者は、まったく異質で、粗く、完全に水平でさえある言語と文体で書かれたテクストを見いだすだろう。この作品が解き放ちうる情動が実効を持つには、作品の書かれた形からの距離という、最初の大きな困難を通り抜けられねばならない。この異質さは驚くべきことではない。われわれが扱うのは十九世紀半ばのチリの文脈にさかのぼるテクストであり、それが文体の点で伴いうるすべてを持つからだ。

すべては、物事が何であるか、それが何であると信じるか、あるいは少なくとも、現れうると考える仕方に対して、どこに自らを置くかに依存するだろう。自由について語るとき、何を意味しているかについて、大した明確さを持っていない。所与の事柄について取れる、あるいは取るべき立場を、取るか取らないかを語る際に、それは複雑となる。だが、現在の状況では、入力として持つものと出力として持つものが、われわれやその過程の一部をなす者に完全に知られているようなことは、ほとんどできない（より正確には、何もできない）のは確かだ。

起こっているのは、近づき、理解しようとする、もっとも強い試みのすべてをなお逃れる現実に、生きているということだ。後者は重要だろう。根本的な行動となるだろう。その機能する様態、機構、存在の仕方を知らない世界に、どうして介入できるのか。真実は、われわれが現実を、つねに経験しており、しかもその作動について確かなヴィジョンを持っていないと知っている、ということだ。真に理解していない世界に生きている。理解することについてのわれわれの理解が、あらゆる現象の外部に現実を想定し、どの幕の後ろにも、作品全体をひそかに動かす機構をつねに見られるはずだとする視点に、甚だしく負っているヴィジョンである、とも言えるだろう。

これらすべての観念について、無限の明示的・暗示的なヴィジョンを持つ。だが、それらが実際に持ちうる性格は、世界で作用する能力の大小を意味しない。どうやって行うか理解していないのに、できることは多くある。あらゆる文学がこの状況を糧とし、自らに指を置くことができなくても存在できる能力のおかげで、あらゆる文学が可能になる。作品は、いったん世界にあると、それを生んだ者から独立する。固有の作用する能力を持つという意味で独立し、自らを構築した動機、構成する素材、あるいは多かれ少なかれ組み込まれる構造的要因から独立して、効果を生む条件に置かれるのだ。

作品は、それを世界にもたらした者とは異なる何かだ。作品は、それを世界にもたらした動機を越える。作品は、それを構成する素材とは異なる何かだ。人工物の世界を考えるには、固有の効果を生むその能力を受け入れねばならない。偶然の法則に応じるわけではないが、一般に、作る者にはまったく知られない仕方で作用しうる効果。作品がこれらの能力を持つのは、ある意味で、あらゆる作品、人間が創ったあらゆる人工物は、存在を持つからだ。それこそが、それらを、その意味では空虚であり、待ち望んでいると言えるかもしれない人間から、区別する。

したがって作品を考えることは、自らを創った生の形態から解放されながら、その一部となる諸世界に効果を生む能力を保ってきた、生の形態を考えることだ。ここでは世界ではなく諸世界と語る。世界を、各々の人間の住む実存的システムと理解するからだ。その世界は、人間であり続けるための根本的要件として、つねに個別かつ唯一であることを必要とする。統一と個別性がないところに、人間性はない。作品、人工物、創造物は、それらすべてとは異なる何かであり、意味も作動の領域も失わずに、そのようなものとして存在し、永続しうる諸世界の体制の、一部なのだ。

こうして芸術は、生を、世界への影響力を持つ存在を、さらには実存あるいは諸実存を創造する機構として現れる（だが、人間性を創るのではない。ここでは、実存を持つものと人間性を担うものを区別するのが鍵だ。それは重要だ）。なぜなら、この差異に、それを維持する能力に、技術の伴う否定的な側面を克服できるかどうかがかかっているからだ。これに、人間性を、より完璧でより厳密な、新しい水準へともたらせるかどうかがかかる。

したがって芸術は、美的な事柄とほとんど関係がない。ただし（もちろん）、美学的な議論を、その現実の、もっとも純粋な場所へもたらせるなら話は別だ。美学が「人間の王国に固有の存在様態」として構想され、実践される場所へ。ここで重要なのは、世界に介入し、それによって相互作用するものに介入する、作品の能力だ。その相手は人間であることも、そうでないこともある。とはいえ一般に、人間としての進化のこの段階では、もっとも関心があるのは、人間自身との関係である。

それが重要なのは、作品がしばしば、小さいと呼びうる役割を持つからだ。生への大きな影響は、日々相互作用する、その種の実体の膨大な数に、よりかかわる。一般に、それらについてわれわれに作用するものは、その蓄積にさらされることによる、と言えるだろう。だが、われわれに影響を行使する能力が大きく異なり、他の作品をはるかに上回るものもある。芸術作品は、その一つだ。

芸術作品は他の作品より強くわれわれに作用できる。芸術家はそこに、自らの世界の美学についての大きな熟達を引き出し、ある仕方で総合することによって、デザイナードラッグのように、その理解に入る条件を持つ者に作用できる、物質的かつ理論的な装置を創ることができたからだ。重要なのは、そのことだ（芸術作品と相互作用する者が、理解するという視点からそれを試みること）。なぜなら芸術は、そのことにかかわるからだ。世界を、芸術家が構築した世界を理解することに。

こうして、この議論の根本的な側面の一つが現れる。芸術作品は一つの世界であり、芸術家の世界から独立した世界だ。それと相互作用する者に大きな効果を及ぼせるのは、そこで生み出されるのが「世界どうしの衝突」だからだ。作品を経験する者と芸術家の衝突ではなく、それを経験する者と芸術作品そのものの衝突。二つの世界の、無制限なものと制限されたものの衝突。この衝突は、いまだ自然と理解し、呼んでいるものに、頻繁に起こることではない。この種の経験を創り、それをもたらし、無から出現させられるのは、人間なのだ。

これによって、作品が経験する者にもたらす効果を、芸術家が事前に計算していたと主張するのではない。実際、デザイナードラッグと違い、効果の種類は十分には予見できない。デザイナードラッグが使用者に生み出せる効果は、「意識が環境および自らと相互作用する能力に影響する、脳の化学的状態」と名づけうる層だけに属するのは確かだ。だが、薬物を予見できるのがその水準だけだとしても、その水準は、効果全体に対して非常に小さいとみなせるが、その（あれほど小さな）ことさえ、芸術的経験となると、かなり大きい。芸術作品では、それさえ予見できない。芸術作品が生み出しうる効果、経験する者に解き放つ情動は、きわめて多様で、その大部分が未知の水準のものだからだ。

誤りをあまり恐れずに言えるだろう。芸術作品との相互作用から生じる経験ほど、人の生を劇的に変えられる経験は少ない。確かに日常と実存の困難は、そのもっとも平凡で普通の水準において、人々が世界をどう見て、どう経験し、どうそこから降りるかという形に、甚大な効果を及ぼす。だが芸術作品の場合も、その影響は巨大であり、日常の生み出せるものより大きいとさえ、言えるかもしれない。

ある映画、ある小説、ある歌は、人の生に思いもよらぬ水準で、そしておそらく無限に多様な仕方で作用しうる。もちろん、映画が人に作用する仕方は、歌によって作用される仕方と同じではない。歌は多くのもの、とりわけ私が「気候」と呼ぶものを伝えうる。それはもちろん音楽だけのものではないが、音楽において十全に解き放たれる。本、たとえば小説の読書は、ある瞬間から次の瞬間にかけて、人の生を根底から変えうる。実存全体に影響する決断へ導きうる。ヘッセの『デミアン』、サバトの『トンネル』、プルーストの『失われた時を求めて』のような本の読書は、それを経験した者を、疑いなく永遠に変えてきた。

そこで問わねばならないだろう。これはすべて何なのか。われわれは、信念、倫理的価値、美的構造の何らかの空虚を内容で満たそうとする、単なるスポンジなのか。そう受け入れるのは、私には深い誤りに思える。だが問題は、一見したよりはるかに複雑だ。多くの異なる水準を伴うために複雑なのである。各々の主題、各々の状況、各々の種類の芸術、芸術家、人間に、つねに現れるわけではない水準を。ブレスト・ガナが『マルティン・リバス』を書くとき、頭のなかにある観念を持ってそうする。だが、それらの観念を、テクストに巧く置けたかどうかを彼がどう考えたにせよ、それらが解き放った効果と情動は、予見できたどの計画も越え、いかなる企画も、そしてなお重要なのは、いかなる予防も越える。

『マルティン・リバス』（本、小説）は、相互作用する世界に甚大な影響を与える。それに取り組み、それについて語るという事実だけから、それを知っている。ボルヘスは、作家の質の異なる水準と超越の可能性について、すでに言っていた。第一級の作家が膨大にいるが、少数にしか読まれることがないだろう、と。そのときボルヘスは、無意識にせよ意識してにせよ、現実は、あまりに多くの作者が成功裡に存在することを容認しないと伝えたかったように見える。それは、このテクストで伝えようとする方向にとって、かなりの意味と有用性を持つ。

だが、少しのあいだブレスト・ガナと彼の『マルティン・リバス』に戻ろう。まさにこの点、「彼の『マルティン・リバス』」、その「彼の」を取ろう。それは何を意味するのか。ブレスト・ガナの『マルティン・リバス』が、われわれの『マルティン・リバス』とは異なることを意味しないのか。あるいはさらに精確に言えば、ブレスト・ガナの『マルティン・リバス』が、それを読み経験した各々の個人の、各々の『マルティン・リバス』とは異なる、ということを。ここで小さな注記。読むことと経験することを区別する。多くのものが読まれるが、芸術作品と相互作用するのは別のことだからだ。体験は、基本的な機械的手順では達成されない。ある事前の素養が必要だ。

この事前の素養という事柄は、芸術一般にとって複雑な主題だ。芸術作品は、ほとんど自動的に経験できるということが、ほとんど常識であるように見えるからだ。まるで、身体をその上に置くことだけで、恩恵を得るには十分すぎるかのように。もちろんそうではない。芸術を経験するには、たいてい非常に複雑で、得るために多くの時間を要する素養が必要だ。逆を信じるのは、人間の経験の本質的な側面の一つを、卑小さと不条理へ還元することになるだろう。これは、素養の乏しい読者が自らの『マ

ルティン・リバス』を構築できないということではない。芸術を正しく鑑賞するための素養の重要性を指摘するとき、素養の不在や貧しさが、作品から何かを得ることの制限要因であると主張しているのではないからだ。言いたいのは、それがより価値の低い、劣化し、単純化され、さらには何の重要性もない経験にまで還元された経験となるだろう、ということだ。

現実の構造の理解に、政治的な側面を導入しようとすると、複雑になる。一般に、ほとんどの（より正確には、すべての）場合、政治は、自らとは異なり、自分が入り込もうとする領域を破壊する。これは、政治的目的で行われた芸術に価値がないということではない（『マルティン・リバス』は確かにその方向へ進む作品だ）。だが、同じ理由から、あらゆる作品は創造者の求めたものと異なる、と先に指摘した。芸術家の探求は、自らに閉じることができないことによって目的を達成する探求である。ある作品を芸術家の現実にもたらしたいと望みながら、その作品は、完成したまさにその瞬間に、創造者からの独立を得るという、一見逆説的な状況にある。もはや創造者に属さず、創造者に反抗して「non serviam」、「私はお前に仕えない」と告げるルシファーのように振る舞うのだ。

これが、あらゆる作者の、生産する作品に対する状況である。もはや、作品をいかなる仕方でも統御できない。覇権的な文化システムの外に生まれたある作品が、単なる民俗主義と名づけうるものを越える力を持つのを妨げる、ある基準によって制約されているように見える問題を、私はいくらか重要と考える。これは複雑だ。作品が折々に自らを更新できるために、より大きく、大規模に受け入れられ正統化された秩序へ刻み込まれる必要があるなら、その回路に入らない作品は、そのような更新を行う際に問題を抱え、甚だしく縮減され、ある時代の非常に特定の現象を語るときにしか用いられない象徴の網に囚われるからだ。

こうして、この事柄の二つの鍵となる側面が表される。ある作品が持ちうる、過度の特殊主義（おそらく形式的な）と呼べるもの、そして作品を特定の時期に分類して閉じ込める傾向だ。第一は、先に言ったように、より大規模な覇権的回路の外で生産された作品であることと、大いにかかわると言えるだろう。特定の文脈で、ある人々によって創られたことが、根本的な特性となってしまう周縁で生産された作品。その単なる存在が、作品自体の伝えようとするもの（その表現が適切に使えるなら）よりも、誰が生産したかを語るように見える作品。

作品が固有の象徴的潜勢力よりも創造者を参照するとき、われわれは複雑な事柄を前にする。作品という現象に、その作品の理解と議論への貢献とはほとんどみなせない還元主義が適用されていることになる。生産時期への作品の閉じ込めにも、似たことが起こる。まさに創られた瞬間が、注意の大部分を捉えてしまうのだ。ここである理由から興味深くなるのは、作品の生産の時代、その創造が起こった時の一瞬である。そうなると、われわれが前にしているのは、十全な象徴的な力とともに、現在や、具体化された時とは異なる時に、容易に位置づけられる作品ではない。

この二つの制限は、疑いなく作品の持ちうる潜勢力を過剰に制約する。自らを更新できないことが、その単なる生産の文脈と異なるものに言及するために使うことを妨げるからだ。これらは、周縁で創られた作品の被る問題である。『マルティン・リバス』は周縁で創られた作品だ。甚だしい還元主義にさらされた作品であり、何らかの重要性を持つに至る唯一のシナリオは、チリ史のある時期の文学的表象としてであり、一般に、心性の生産者として指摘されることが、その最大の生産性となる。いくつか例を挙げれば、カフカ、ジョイス、三島の作品には、このようなことは起こらないだろう。それらの作者は普遍的とみなされるから、起こらないのである。

そこで、なぜある作者は普遍的とみなされ、他はそうではないのか、なぜある作者はつねに有効で、熱心に文脈を与え直され、複数の言語で再版され、文学とは異なるメディアに翻案されるのか、などと問える。これは単純な答えを持ちえない。だが答えがいかに難しくても、問わねばならない。周縁の運命は、一部それに依存するかもしれないからだ。何が、ある作者を全体に、全体性に言及させ、他の作者にはさせないのか。その主題が必ずしもより普遍的だとは、私には思われない。作品が、経験する者に情動を解き放つ形を理解することが問題なら、これらは重要な事柄だ。

作品の解き放つ情動が生産の文脈によって過剰決定されるのは、あまり意味をなさないように思える。文脈は作品を汲み尽くさず、実際にはその始まりにすぎないと、事実上理解しているからだ。作品は、単に生産を参照するもの以外のすべてに住む、潜在能力の系列全体を持つ。単に生産の文脈を参照するものは、作品のもっとも重要性の低い、もっとも機械的な部分でさえあると、大胆に言ってもよいかもしれない。疑いなくこれは、いくらか大胆な宣言となりうる。低開発世界の文脈で生産された芸術の少なからぬ部分は、その条件を主題化し、文脈が作品の内容そのものの一部として大きな重要性を持ちがちであることを考えれば。もちろん、それが、その文脈の物質的・文化的条件を改善することへの貢献となるかどうかも、議論の余地がある。

だが、全体性を参照しようとする作品は、根底では、全体性と理解するもののユートピア的な像を参照するにすぎないのではないか。言いたいのは、あらゆる全体性は、含むものについての曖昧さの一形態でもあり、あまりに多くを包摂することによって、包摂するのをやめてしまうということだ。「皆が泥棒であるところでは、誰も泥棒ではない」という言い回し、あるいは主題によりふさわしい「すべてが芸術なら、何も芸術ではない」と同じ意味で。そうすると、普遍的（さらには古典的な普遍）とみなされる作品が、ある意味で複雑な状況に直面しているかもしれない、と言うとき、問題はひっくり返される。偉大さを証明する側面とされがちなその普遍性が、実は欠如を、生産の文脈から離れたものに固有の、重みの欠如、軽さを示しているかもしれないかぎりにおいて。

欠点とみなせたものが、いまや価値の側面として組み入れられる。だが、何かを行えることが、行わねばならないことを意味しないのは、知っている。だから、伝統的に普遍的とみなされてきた作品を、欠如の状況に置く再解釈、解釈学的操作ができるという事実は、その方向に従わねばならないことを意味しない。まず、それによって、少なくともこの瞬間に、本当に価値ある結果に達せるかが、あまり明らかではないからだ。

情動が世界に入るかどうかを規定する限界を変えるのは、テクストやパンフレットを通じてではない。それは現在の理解を逃れる非常に多くの問いに依存するからだ。残されているのは、ただ続けることだけだ。それは未来の「自由な者」の課題である。フィクションと理論が、つねにそうであったもの、同じ顔として現れる未来。時、意志、異なるものから発する秩序に刻まれた顔。根底では、作者を殺すのは、それほど難しくない。このテクストで従ってきた線全体に、それができなかったとしても。実際には、困難はわれわれがなお登場する生産の文脈に、よりある、としよう。おそらく言葉を徹底化すべきなのだ。

問題を解決する計画も、焦点を定める方法もなく、転じても帰結を持たない仕方もなく、ここの美術館の内部に存在することもないと、われわれは知る。そこは空で、満ちているが、絶望するほど空である。形容詞は脇へ置こう。空虚は色づけられてはならず、中立で、表情なしに留まらねばならないからだ。人間はあらゆる身振りを誇張する傾向を持つ。病理的なものへの、あまりに大きな傾向。こうして人間は縁にいるが、これは新しいことではない。われわれはつねに縁に、つねに恐れと危機のなかにいるからだ。

身体を、以前には創られ、いまや創られていない機械を、彼らはその実体にもたらす。提案と実行が可能な機械、ただ反応し、振付に従うことしかできない操り人形。書くことはすでに、単純さの問題を通り過ぎている。われわれはまだ、それを克服していない。異質な記憶の装飾から自由になるのに、甚だしい苦労をする。どの程度まで戦闘が差し迫るかは、知らない。宗教の回帰が必要だと知っている（そう、知っている）。二十世紀前半のフランスとドイツの実存主義者が、すでにそう言った。関心のかなりの部分を技術の問題に集中させたとはいえ。その事柄は、もはやそれほどわれわれにかかわらない。

われわれの時代は、人間の基礎、人間の限界、人間が凌駕される形を問う時代だ。問題は明らかで、木々は明らかで、誤りは半透明だ。恒常的な対立が、いま釈明を求める。芸術の意味を失ったが、芸術そのものを失ったのではない。それはつねにあったところ、歴史に住む。情報は豊富にあり、それを何かに用いることを学ばねばならないだろう。朝からは、死を中断し、現れずにいることができるだろう。語り、じっとしていることが義務となるだろう。新しい哲学が、われわれのこの芸術、芸術、破壊するよりも多く築く芸術を通じて、道を開く。

すべては中断できる。この世界を支えられ、われわれは（何千年もの断罪のあとに）、人間の現実を構造化する教義としての悲劇を克服できるだろうからだ。この場所には容易なこともある。だがわれわれは、速く濃密な芸術を愛する。それゆえ、背を向けて語ることも、消え去った神と交信することもできない。現れることの回帰を訴える。統一は絶対の要件、中心的なもの、周縁、余白を支えるものの力の、明示的な現れだ。中心に住むものの実用的かつ概念的な影響なしに、周縁は存在しない。

芸術の地獄は形であり、求めながらも逃れたいものだ。絶対的な無秩序に至るまで物質的な、対象とその熱狂的な精神から逃れること。鍵は、命じ、従う能力にある。技術から離れ、少しずつ、ゆっくり集中して、闇を、全面的な闇を、決定的に受け入れることに。手元の概念は芸術となり、光は形而上学のなかで自らを破壊する。ここでこそ、ポストヒューマンの芸術は新しい言語を語れる。死と、いまだ自らを思考する存在に忍び寄る動物的な規定要因から解放された、存在の言語を。

時は過ぎるが素材は過ぎず、表面も理論も過ぎない。待ち、自らをプログラムし、普通に自らを書き、それから巻かれ、解かれ、形を壊し、再構築する芸術。選ぶことは死ぬことであり、死ぬことは一つの瞬間に、歴史の一瞬にすぎなかった。そのように

して、ある人間の欠陥が表された瞬間に。望むのはすべてだ。カノンと闘い、理解の欠如を葬り、企てと文字を混同すること。読むことは中心的である。下からの注記は中心的である。翻訳は、書かれたものの意味を変えるが、それによって露わにする。言葉と武器、記録、鳥と鏡。結びつけられ、卓に置かれるに任せる構造化。それは驚異的で、尊厳ある振る舞いだ。

芸術の現実とは、肉と宇宙を、ただ一つの仕方で、斉しく参照するものだ。大衆の心への書き込み、壊れているが役立つエレベーター。必要なのは、この必要な芸術を組み立て、言葉と舞台を提供し、信じるための糧を与えることだ。多くの部分で、それによって動くのだから。そのため、言葉を脱局在化し、枠から、起源的な脆さから、超越論的な二項対立から抜け出す必要があることに合意せねばならない。自らを暗くし、印をつけ、光に踏み入ること。実験を、顔料と内なる意味の色づけを、感じること。

いま操作は、変化の、変化の意味の、周縁からの逃走の、方向を変えられる（中心へ正面から歩き、装置を組み立てること。凌駕しえないものと逆の道）。植物、鉱物、コンピュータ。ソフトウェアと未来に満ち、救済に満ち、単なる逃走の拒絶に満ちている。この瞬間の使命がある。純粋な不調和だけを基に自らを構築しない芸術を、思考すること。そのようなものが生まれるには、より柔弱でなく、われわれの象徴的地平の再構築へより向かった、別の芸術家の出現が必要だ。必要な強度と効率は、もしかすると美術学校からは来ない。それらは、期待される場所、求められる操作、受け入れられた反抗の物語の再生産に、閉じこもりすぎたのかもしれない。

これは国際的に取り組まねばならない国際的な問題だ。東京からサンティアゴまでの問題であることに、疑いはない。武器と、自らが無制限であると知る者の、形がまだ限界に、縁に達していないと知る者の、獰猛な静けさが必要だ。いま求めるのは、教会が教会へと変えられることだ。確かなものが徴に物質化し、意味の不在に降伏せず、過剰な教育を受けた冗語から詩が現れること。芸術の場における構造的な混乱は、われわれによって解き放たれねばならない。作品の構築において、より少ない政治と、より多いリスクを。

もう一つの鏡を見ずに、哲学は自らを刷新し、気を紛らわせ、企業的な衣服を汚し、公式に囚われた才能を解き放つ。少数の者の虚偽で、古い正午に隠れていたあの反逆者のための空間を開くには十分だった。豪奢のあらゆる現れは、それらの目的から逸

らされた。いま自らがどのような時にありうるかについて確信を持つとき、あらゆる集中は動じない。それらすべては、湾の縁で直接に繰り広げられる。特定の湾、特定の年。一九八四年は、完璧な軍事的遊戯の始まりだ。

同じ色が、過ぎ去った時代の誇りであった、あの獰猛な怪物性を捨て去るために用いられていた。いまやそれらは、単に自己像に問題のあった一時代の、生きた像にすぎなかった。文字には過剰な配慮、配線のあいだには同じ汚物。不規則なガラスに額装された太陽は、いまや本当に歴史的な移行に完全に埋め込まれた、新しい朝のリズムを刻めるだろう。制限されたものこそが自らを押しつけようとし、対話がある特定の方向からしか可能でなかった時代の痕跡は、残らないだろう。

それらすべては、絶滅しつつある世界、否認され、行動のためではなく、現実とのつながりの完全な欠如のために、絶滅を宣告された世界の仕事だ。幻覚剤に満ち、われわれは、デジタル化とその崇高との親密なつながりの列車へ、後ろ向きに沈み込めた。テクストが形式的なものと理想的なものの過剰接続を語ったところで、単にもう少し広く眼を開き、勧められない作者をもう少し読むことができた。より正確には、知を伝えるはずだった者たちに、知られてさえいなかった作者を。前進したとすれば、それは受けさせられた教育にもかかわらず、そうしたのだ。

翻訳に頼るべきではない。翻訳は感覚の誘惑に密接につながり、感覚は、それ自体の悪徳によってつねに無効化される中立の空間だからだ。それらはみな、秩序、自らを生み出し、意味、存在理由を与えた海から、はるか外にあった。無制限なものと混沌としたものの混同は、芸術の発展に内在する事柄だ。それは、われわれすべてを、包み込まれた永遠のつねに輝くイメージへと導く、還元不能な流れの徴である。

敵対する意味の形式的な還元と、複数性が甚だしく嫌悪するように見える義務感の、永続しない加速を誘う、破りえないロゴスなしに生きるすべを知らないことには、罪のある割合が含まれる。芸術の悪徳が、距離を置き、マーラーを読み、何らかの祖先伝来の扉を開くために威張る仕方を見つけるのは、川のなかである。死者に触れまいとして、われわれは結局、理性が露わにしうるものを恐れるに至った。結局、われわれは機械だ。

雨が降り、歴史の記録が暗くなるあいだ、見つけたものを食べ、専用の空間に地平を額装した。確かめていくことは、未来において行い、各作品の題名を注意深く記した。最大の輝きは、おそらく美的な暴力への、ある近づき方から来た。そこからは、

苛烈な立場から、なおある発出が可能だった。アンドロイドはいまだわれわれのあいだを歩き、ある科学的な眼差しが未来の人間に与えたかったように見える小さな家は、それ自体に未来を持たなかった。拡張は全面的であり、不注意な観察者にもっとも奇妙だったのは、その操作が太古から絶えず起こってきたことだった。巨大な、千年の陰謀。

美的な軍事化は全面的であり、望まれている。滑りではなく線が優勢となる形式的な地平を開きたい者たちに、求められている。遠い哲学者の薄明の枠。海から、近くの神を倒そうとする。聖像は、知られた知の源泉を跳び越え、光が生まれるのを見たくない影に、嘘をつく。